

序 文

この度、東京大学名誉教授の小池和彦先生より御推挙いただき臨牀消化器内科 Vol.38 No.7 増刊号「肝疾患—診療のチェックポイント 2023」の企画・編集を担当させていただくことになりました。本テーマを掲げての増刊号は 21 年ぶりの発刊になります。前回の編集を担当された小池和彦先生からのバトンを受けこのような仕事をさせていただくことは誠に光栄であると同時に大きな責任を感じております。21 年前というと、ちょうど私が研修医を終えて消化器・肝臓学の道に足を踏み入れたときになります。すなわち、私自身肝臓学・肝臓病学の発展を体感してきた世代です。そこで、同じ境遇で bed side で肝疾患患者と向き合ってきた同世代の先生方に執筆を依頼したいと考え、小池和彦先生にもご快諾いただきました。

前号を拝見したところ現在では、疾患の概念から検査・治療方針まで様変わりしております。そこで、普遍的かつ基礎的な領域に加え、現在学会等で議論が活発な項目を盛り込み、全く新しいコンテンツとなりました。とくに大きく変わった点はウイルス性肝炎の治療であると思います。2000 年に B 型慢性肝炎に対する核酸アナログ製剤が承認され、多くの B 型慢性肝炎患者のウイルス量を感度以下にすることで肝線維化や肝発癌を一定頻度で抑制することが可能になりました。また C 型慢性肝炎においては 2014 年以降これまでのインターフェロンに代わり直接型抗ウイルス薬の登場により HCV を排除できない症例はきわめてまれになりました。さらに、本邦で 2,000 万人以上罹患しているといわれている脂肪性肝疾患について、NASH の概念が広く知れわたった 2000 年ころよりも診断や治療は大きく変遷し、今日では非侵襲的に肝線維化を診断する方法や機器の発展もみられます。肝硬変患者における多くの合併症に対する薬剤も多々登場し、小生が若いときにしばしば外来で行っていた腹水穿刺ドレナージや、夜間の肝性脳症での救急搬送も明らかに減少している印象です。そして、近年の最も大きな変革は肝細胞癌に対する薬物治療であると思います。一方 2019 年以降猛威を振るった新型コロナウイルス感染症との関係が指摘されている小児の急性肝炎については、今後原因が解明され肝疾患診療の一項目として加わっていくことでしょう。

本増刊号では、さまざまな肝疾患の診断ならびに治療の進化について、消化器・肝臓系の主要学会で発表演者として第一線で活躍される日本肝臓学会の先生方にご執筆いただきました。一つ残念であったのは、誌面の都合上、本増刊号がすべての領域を網羅しているわけではないということです。執筆に加わっていただきたかった先生は

この他にも多くいらっしゃいました。まだまだ興味深い多くの領域がございますので別の号などを参照いただければと思います。多くの先生方のご協力で、若手の先生にはもちろん消化器・肝臓専門医にも知識の整理になる素晴らしい増刊号になりました。最後に、肝臓領域の諸先輩方には、肝臓グループへ若手をリクルートするツールの一つとして本増刊号をプレゼントしてほしいと考えます。

2023 年 5 月

日本医科大学付属病院 消化器肝臓内科

厚 川 正 則